

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：32663

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13585

研究課題名（和文）フランスにおけるジプシーの「旅の共同体」に関する文化人類学的研究

研究課題名（英文）Cultural-Anthropological Study on the Travelling Community of Gypsies in France

研究代表者

左地 亮子（野呂）（SACHI, Ryoko）

東洋大学・社会学部・准教授

研究者番号：50771416

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：フランスのジプシー・マヌーシュは、移動という生活様式をとりながら定住民社会の隙間に散在して暮らしてきたが、現在、進行する定住化とそれに伴う居住政策の下で、一つの名と特定の場をもつ「共同体」として一元化、周縁化されつつある。本研究は、この人々を「ジプシー共同体」として集約し隔離する諸力との交渉の中で、マヌーシュが新たに紡ぐ「旅の共同体」に着目し、押し付けられた共同体を離れ、束の間の旅をするマヌーシュが、異質な他者との出会いを通して市民社会内部に創出する非同一的な共同性を明らかにする。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、ジプシーの「旅の共同体」という視座から、普遍性と差異という対立軸に還元されがちな市民社会とマイノリティの関係を問い直すものである。西欧社会の隙間でその社会的条件と権力の作用（そしてその矛盾）を引き受けながら生きてきたノマドが、今日新たに紡ぐ非領土的で非同一的な共同性を明らかにする点で、本研究は現代社会に潜在する普遍的で活力ある人間の関係性をめぐる問題に新たな知見を提示する。また、移民や難民など、移動を活発化させている非ノマドをめぐって深刻な社会問題を抱える今日の社会の実態を捉え、その将来像を展望する上で看過できない民族誌的事例を本研究は提示している。

研究成果の概要（英文）：French Gypsies-Manouches are traditionally known as a nomadic ethnic group, whom are today leading a largely sedentarized lifestyle. As the sedentarization leads to the concentration of Manouches' caravans proceeding at an accelerated pace in the marginalized suburbs, Manouche families have faced difficulties in reconstituting their social organization, which is closely linked to nomadism. In particular, the residential segregation has affected their community characterized by its ability to adapt to changes.

In this context, this study focused on how the new way of travelling became an important means of survival and source of community for the Manouches. By examining different types of travel practices, the study demonstrated how Manouches travel to temporarily leave their settled residential homes to enter other areas, shaking the boundaries of their community which have been affected by the ghettoization and the enclosure of their caravan sites and houses.

研究分野：文化人類学

キーワード：ジプシー ロマ ノマド ノマディズム 移動生活 共同体 市民社会 フランス

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

これまで代表者は、フランス南西部ポーにあるジブシー・マヌーシュ(「ロマ」を自称しないジブシーの下位集団)の定住地を主要調査地としてきたが、ここでは2010年以降、定住化を進めながらもキャラヴァン(キャンピングトレーラー)暮らしを続けるジブシーのために、適合住宅と呼ばれる特別社会住宅を建設し、彼らの社会的統合を推進する政策がとられている。この政策は、特定のマイノリティ集団を対象に文化的差異に配慮した措置を実施する点で、民族や宗教等の差異を捨象した個人=市民の平等という理念から多文化主義を避けてきたフランスでは例外的な試みである。だが、調査地では、その結果逆説的な事態が生じている。マヌーシュの共同体は、本来、離合集散性と個別家族の自律性を重視する緩やかな連帯を特徴とし、大集団で集住するのではなく個々に散在することで主流社会内部に居場所を見出してきた。しかしこの居住政策で彼らは、地域社会から社会的物理的に周縁化された一つの居住地へと追いやられ、望んでもいない共同体=ゲッターに閉じ込められることになった。つまり、社会的統合を目的とした政策が隔離という結果を、共和国の分裂を招くとしてマイノリティによる共同体主義を警戒してきたフランス社会がマイノリティの共同体(主義)化を導いている。

本研究を開始するまで、代表者は、人類学的政策論の観点から上記政策とその逆説的事態を分析してきた。そこで本研究では、この共同体化の諸力に対するマヌーシュの反応を次の2つの視点にもとづく民族誌的調査研究により解明することにした。

まず、第一課題Aでは、2017年末に調査地で完成予定の社会住宅群に焦点を当て、居住政策が既存のジブシー共同体に及ぼす影響を検証した。そして第二課題Bでは、キリスト教二教派の移動を伴う宗教活動(カトリックの聖地巡礼/プロテスタント系ペンテコステ派の移動集会)、及び葡萄収穫(季節的農作業)の経済活動を目的としたジブシーの旅に着目し、旅の合間に人びとが主流社会が押し付けるものとは別様の共同体を立ち上げる状況を探った。

課題Bの着想は、代表者がすでにフランスにて行ってきた「ジブシー巡礼祭」の調査研究により得られた。南仏の町で毎年5月に開催されるジブシー巡礼祭では、聖地を目指し旅をするジブシーは宗教的価値を獲得し、周縁的な日常とは異なる共同体を形成するようみえる。ただし実際に観察されるのは、信仰という実践やジブシーというアイデンティティの同一性により明確に境界画定された共同体ではなく、異質な他者との偶発的な出会いと共在を促す共同体である。ジブシーは、信仰を目的とした旅の中で様々な活動(商売や結婚相手探しやその他、定住性の高まる日常からの解放としか言えないような多様な娯楽(野外での食事や憩いや遊び)を行い、その一見雑多で、信仰とは関係の無い非真正な諸実践を通して、旅の目的や出自を異にするジブシー、非ジブシーの観光客・地元住民・商人という異種の人びとと言語的・身体的・情動的に交わり、その共在状況を楽しむ。このように巡礼祭に関する調査研究を通して、代表者は、主流社会がジブシーに対し、アイデンティティの同一性や固定的な領土に基づく共同体化を強いる一方で、ジブシーが旅という動きの中で、実践やアイデンティティの同一性に依拠しない共同性を生きようとする側面に関心をもった。

以上のジブシー共同体をめぐる2つの局面は、市民社会とマイノリティの関係を問い直すための有効な事例となる。現代の市民社会論では、人権・平等・民主主義という普遍価値の推進と民族・宗教的差異の承認をめぐる政治的対立や、支配と抵抗という権力関係が指摘され、「普遍性を志向する市民社会」と「差異を主張するマイノリティ」という構図が自明視される傾向にある[e.g. Kymlicka 1995; Schnapper 1991; Wieviorka 2001]。これに対し本研究は、「旅の共同体」という理論的視座から、ジブシーが「共同体主義(差異)」として「市民社会(普遍性)」と対置させられる共同体ではなく、市民社会内部の非同一的な共同性を生きる局面を探究し、マイノリティをめぐる市民社会論に新たな知見を提供することを目指すものである。

2. 研究の目的

フランスのジブシーは、移動という生活様式に基づき、定住社会の隙間に散在して暮らしてきたが、現在、進行する定住化とそれに伴う居住政策の下で、一つの名と特定の場をもつ「共同体」として一元化、周縁化されつつある。本研究は、この人びとを「ジブシー共同体」として集約し隔離する諸力との交渉の中で、ジブシーが新たに紡ぐ「旅の共同体」に着目する。具体的には、ジブシーの共同体をめぐる2つの局面として、A 定住地での居住政策と「共同体化」の推移を追いながら、B 聖地巡礼・移動集会の宗教活動、季節的農作業の経済活動を契機に現れるジブシーの「旅の共同体」を検証する。そして、押し付けられた共同体を離れ、束の間の旅をするジブシーが、異質な他者との出会いを通して市民社会の内部に創出する非同一的な共同性を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、以下の調査項目を研究期間内に検証する。

A 定住地における居住政策と「共同体化」の推移に関する調査

B-1 「旅の共同体」と宗教活動 カトリック聖地巡礼、ペンテコステ派移動集会

B-2 「旅の共同体」と経済活動 ワイン用葡萄収穫の季節的農作業

Aでは、2017年末に完成予定の新社会住宅群の調査を通して共同体化の進行を追い、社会住宅移住後の人びとの社会関係の軋みや変化、自己統治の動きを調べる。そしてB-1とB-2は、この

Aの共同体化プロセスとコントラストをなすジプシーの「旅の共同体」の特徴を探るための調査となる。具体的には、ジプシーが、旅という動きやその「出会いの偶発性」[Massey 2005]を通して、Aの事例ではみられない人と人の関係、すなわち非恒久的で同一性を志向しない共同性を紡ぎ、「マイノリティ共同体」ではなく「市民たちの共同体」の内部に自らの居場所を探る状況を調査する。分析では参与観察と映像撮影により収集する資料を活用し、旅の空間に居合わせる人と人の身体的・情動的な関わりを掘り下げて、「共にあること」をめぐる交渉の様態を探る。理論研究では、ジプシーの民族誌的事例から市民的共同性の概念を深めることを目指し、人類学者に加え、ジプシーと非ジプシーの共住やジプシー排除の歴史を地理学的空間分析や歴史学的史料調査により進めている仏英の研究者と学際的な議論を行う。

4. 研究成果

3年の研究全期間にわたり年に2回から3回の現地調査を実施することで、本研究課題に関わる調査データ(A 定住地における居住政策と「共同体化」の推移に関する調査、B-1「旅の共同体」と宗教活動 カトリック聖地巡礼、ペンテコステ派移動集会、B-2「旅の共同体」と経済活動 ワイン用葡萄収穫の季節的農作業)を収集することができた。そして、これらの調査データを分析し考察した論考を複数の論文・学会発表(および近刊の単著書)にて発表した。以下に重要なポイントを挙げておく。

(1) マヌーシュの「ゲッター化」

まず本研究では、Aに関わる調査として、フランスのポー地域における居住政策の推移を追い、居住政策の対象者となった人びとへのインタビュー、新居住地での参与観察を実施した。それにより、今日、ポー地域の再周縁部にて、一般の市民がほとんど立ち寄らないマヌーシュのキャラヴァンで埋め尽くされた区画「マヌーシュ村」と呼ぶべき風景が形成されている様子を具体的に明らかにすることができた。

「マヌーシュ村」形成の背景には、マヌーシュの定住化の進行と居住政策の転換が関わる。マヌーシュは適合住宅と呼ばれる社会住宅を特定の市民に提供するという新居住政策を通して、地域内での移住を強いられた。本来、この政策はマヌーシュの社会的な統合を目的としていた。しかし、マヌーシュの地域内への「分散」移住計画を阻む社会的・政治的な要因が幾つも合わさった結果、マヌーシュは、地域周縁の一地区に集合的に隔離されていった。

フランスでは、マイノリティの共同体主義は個人の自由と平等を侵害するとして警戒されてきた。そしてマヌーシュにも、この種の共同体主義のイメージが付与されてきた。しかし本来、マヌーシュの共同体は非集権的で離合集散性を特徴とする。マヌーシュは、共同体のメンバーが移動の機会にあわせて、集合と離散を繰り返す共同体に生きてきた。それは、大人数で一定の土地に集住し、共住する人びとのあいだで共通のルールや価値を定め、共住関係を安定させる、このような定住農耕民社会型の共同体とは異なる。むしろ、移動することで、集団編成は生活の事情にあわせて柔軟に変化し、共同体内部の争いも解決されていた。つまり、ヒエラルキーや権力ではなく、移動という手段により人間関係を調整する、こうした共同性に馴染むがゆえに、マヌーシュは分散移住を希望していたのであり、結果的に、大規模で固定的な集住を強いる「村」に閉じこめられることで、社会的なストレスを抱えることになった。つまり、現在マヌーシュのもとで生じているのは、マイノリティによる(マヌーシュから発せられた)共同体主義ではなく、マジョリティによるマイノリティの共同体への封じ込めといえるものだ。この事例は、マヌーシュという個別の対象を超えて、フランス共和国における社会的・文化的・宗教的マイノリティの社会的統合をめぐる議論に重要な知見を提示する。

(2) マヌーシュによる新たなノマディズムの実践と共同体の境界の交渉

現地調査では、こうした「マヌーシュ村」にたいするマヌーシュ自身の抵抗や不満の言葉を聞き取ることができた。だが他方で、「マヌーシュ村」という自ら選んだわけではない土地に住むことを余儀なくされた人びとが行う移動生活、および、共同体の境界を揺り動かす様々な実践についての情報も豊富に得ることができた。

適合住宅という新たに得た「旅の拠点」から東の間のヴァカンスや親族訪問や巡礼に出かけていく人びと、適合住宅への移住を拒否したり、改宗を通して新たな世界へアクセスしたりして、旧来の地縁共同体内外の社会関係を複数化、有限化する人びとがいるなど、現地調査では、一見一つの領土内部に閉じこめられたかのように見えた「マヌーシュ村」内部の人びとが、完全に「ひとまとめ」にされたわけではなかったことが判明した。地理的な移動という点でマヌーシュたちが行う移動の諸実践には差異・多様性があるが、いずれもそれらの移動実践は、定住地における限定的な社会関係や「マヌーシュ村」として押し付けられた共同体の束に動きをもたらすものだ。こうして今もマヌーシュが、移動の実践を通してゲッター化された定住地の限定的な社会関係に閉じられない関係を探索し、「マヌーシュ村」という押しつけられた共同体の境界を開く試みを展開していることが明らかになった。

このように本研究では、離合集散的な共同体に生きてきたマヌーシュが定住化の時代においてノマディズムと共同体を再編する状況を示すことができた。これらの事例は、定住化という社会変化に直面するノマドの共同体、および広く人間社会の共同体をめぐる人類学的議論に新たな知見を加えるものである。

(3) 移動生活を通じた「旅の共同体」の再発見

移動の実践を通してマヌーシュが定住地の外で模索する人間の関係性について明らかにするため、本研究では、B-1「旅の共同体」と宗教活動 カトリック聖地巡礼、ペンテコステ派移動集会、B-2「旅の共同体」と経済活動 ワイン用葡萄収穫の季節的農作業に関わる現地調査を実施した。とりわけ、3年全期間にわたり複数回実施したカトリック巡礼とペンテコステ移動集会の調査が本研究にとっては重要な位置を占め、それらの結果からは、以下の点が判明した。

まず、キリスト教二教派に分かれるジプシーの信仰はいずれも移動を伴う実践(巡礼・移動集会)を特徴とし、それらの実践はジプシーを民族共同体に閉じ込めるのではなく、反対に、異種の他者との出会いに開かれた公共圏に導くという点だ。

定住化が進む今日、ジプシーは地域社会から隔離されたキャラヴァン宿営地に集住することを強いられている。この閉塞的な状況下で彼らが宗教実践を主目的として定住地外部で展開する移動生活は、信仰とは無関係の諸実践(商売や親族集会や定住性の高まる日常からの解放としての娯楽)を伴い、それゆえ彼らに、信仰やジプシーという属性の同一性を共有しない多様な他者(旅の目的や出自を異にするジプシー、非ジプシー)との出会いをもたらす。ジプシー・ペンテコステ派の信仰集会には非ジプシーや非信者も混在し、野外で開かれる集会の空間的特性も相まって、ジプシー信者は集会を「公に開かれたもの」と表現し捉えてもいる。

宗教離れが進むフランスの一般社会では、ペンテコステ派はしばしば「カルト」として警戒されており、その信仰は、明確な体系と主義に支えられた宗教共同体への参入に結びつくようにみえる。しかし、ペンテコステ派であれカトリックであれ、マヌーシュが向かう宗教実践の現場では、「普遍主義に背を向ける共同体主義」という見方とは反対に、「多様な他者との出会いの場/公共圏」を目指す人びとの姿が観察される。「マヌーシュ村」として形成された空間の外部にあるような「フランス社会の内部」に立ち現れるこの「旅の共同体」は、出自や信仰やその他の属性の同一性に閉じられた共同性ではなく、むしろ、目的や帰属の同一性を問わない雑多な人びとが差異や敵対の可能性を解消することなく、それでも共にある空間に身体を浸すという意味での共同性を特徴とする。これは、「マイノリティの宗教」を「市民的平等に開かれた普遍主義」と対置する議論の限界を示唆する事例である。

(4) 今後の研究の展望

以上、三年間の調査研究を経て、マヌーシュのゲッター化、および今日における移動生活と「旅の共同体」の特徴を明らかにすることができた。この研究からは、マヌーシュのノマディズムの現代的展開において、ペンテコステ派信仰に関わる宗教実践が極めて重要な位置を占めていることが判明した。そのため、2020年度から開始する新規研究課題(20K13288「フランスにおける「ジプシー」のペンテコステ派宗教実践に関する文化人類学的研究」)では、マヌーシュのペンテコステ派キリスト教の信仰実践を丹念に追ひ、西欧市民社会の普遍主義とせめぎ合い、共鳴するマイノリティの宗教実践を明らかにすることを旨とする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 左地亮子	4. 巻 10
2. 論文標題 不確実性に満ちた環境に寄りそい、動くこと フランスにおけるマヌーシュのノマディズムと共同体をめぐる考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 年報人類学研究	6. 最初と最後の頁 80-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 左地 亮子	4. 巻 201
2. 論文標題 フランスにおける「ジプシー」の信仰と旅	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Mネット	6. 最初と最後の頁 32-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 左地 亮子	4. 巻 2018
2. 論文標題 物語化に抗する沈黙とアーカイヴ フランスのジプシー共同体における二種の記憶行為をめぐる考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Contact Zone	6. 最初と最後の頁 240-275
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Sachi-Noro, Ryoko	4. 巻 97
2. 論文標題 Decline and restructuring of Gypsies' Nomadism in France: Beyond the Nomadic/Sedentary Binary	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Sedentarization among nomadic peoples in Asia and Africa (Senri Ethnological Studies)	6. 最初と最後の頁 87-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 左地亮子	4. 巻 41
2. 論文標題 育まれる「本当の名前」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 月刊みんぱく	6. 最初と最後の頁 20-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件(うち招待講演 1件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 左地 亮子
2. 発表標題 アーカイヴ＝イメージの力をインターネット上の記憶の場から考える フランスにおけるジプシーのコメモラシオン運動を事例に
3. 学会等名 第116回現代人類学研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 左地 亮子
2. 発表標題 現れるイメージ、紡がれる歴史 フランスのジプシーの想起と沈黙と 歴史すること の関係をめぐる考察
3. 学会等名 「ディアスポラの記憶と想起の媒体に関する研究」第二回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 左地 亮子
2. 発表標題 マヌーシュよ、どこへ行くの? ジプシー の民族誌、そして、不確実な世界に住まう ノマド の人類学へ
3. 学会等名 日本文化人類学会 2018年度第1回関東地区研究懇談会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 左地 亮子
2. 発表標題 在法國環繞著「吉普賽人」的 居住政策與景觀改造（フランスにおける「ジプシー」をめぐる居住政策と景觀改編）
3. 学会等名 台湾・国立政治大学「風景、景觀的改變與地域社會的變化」研討會（國際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 左地 亮子
2. 発表標題 共和国と「ジプシー」 フランスにおける「ジプシー」政策の連続性と例外性、そのパラドキシカルな帰結をめぐって
3. 学会等名 第27回「移民の参加と排除に関する日仏研究会」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 左地 亮子
2. 発表標題 ノマドがツーリストと巡りあうときーフランス市民社会の只中に現れるジプシーの「旅の共同体」について
3. 学会等名 白山人類学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 左地亮子
2. 発表標題 不確実性に満ちた環境に寄り沿い 動く こと - 居住地再編に揺らぎ、変態するフランスのマヌーシュ共同体
3. 学会等名 南山大学人類学研究所主催・公開シンポジウム（公募企画）「不確実な世界に住まう～遊動ノ定住の狭間に生きる身体～」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 左地亮子
2. 発表標題 めぐりあう沈黙とアーカイヴ フランスにおけるジプシーの服喪とコメモラシオン
3. 学会等名 筑波大学人文社会科学研究科 現代語・現代文化専攻講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 左地亮子
2. 発表標題 物語化に抗する沈黙とアーカイヴ フランスのジプシー共同体における二種の記憶行為をめぐって
3. 学会等名 シンポジウム「共同体を記憶するーユダヤ/「ジプシー」の文化構築と記憶の媒体ー」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 左地（野呂） 亮子
2. 発表標題 旅の生活を語るモノと迫害を告発するアーカイヴ フランスのジプシー社会における「想起」の始まりに関する考察
3. 学会等名 日本文化人類学会第51研究大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考